

箱館戦争資料 (その3)

官軍着用の

洋式軍服

この軍服は薩摩藩兵具第二番隊長恒吉休右衛門が戦死の際（明治2年5月11日桔梗野から五稜郭攻略戦に向かう途中）着用していたもので、右脇下に銃弾貫通の跡があり、同時に使用していたチョッキには血潮が一面に黒くこびりつき当時の生々しさを物語っている。

布地は黒羅紗、裏地は毛平織の冬服で、襟袖口には緋ラシャを用い、その上に黒の打紐で渦巻連続山形模様を縫付けたのは、後の兵種と階級表示と思われ、また両肩には鎖状黒組紐を装している。前釦は5か所にかけるよう製作されていたのを、態々とりやめ鉤状留金（ホック）を用い、胸飾りを兼ねた4段の胸紐形式に改めたものである。この型は明治6年陸軍が採用した肋骨将校服の先駆となったもので、日本軍服変遷史上極めて貴重な資料である。

寸法：丈 69・袖丈 62・胴廻り 94(cm)



博物館 昭和52年度の指標と事業

館長 石川 政治

本年の当館の指標は「市民に親しまれ、活用される博物館として、その教養・調査研究・レクリエーションに資するため、博物館体制の充実および博物館活動の促進をはかり、教育・学術・文化の発展に努める」ものである。

これらの指標にもとづいて5か年連続シリーズもの日本海文化展をとり上げてきた。

この日本海文化展は54年をもって終了の予定だが、本年は「北前船がもたらした工芸」の数々をとり上げた。即ち江戸時代の中期より明治の中頃まで、北前船の全盛期にどんな工芸品（加賀友禅・輪島塗・伊万里焼等）を蝦夷地に持ち込んだか、また持ち込まれたこれらの物を、誰がどんな方法で使用したかを通じて、日本海経由の文化、経済交流をさぐる。

函館の人々にとって、大変身近な問題であるこの日本海文化展には、いろいろな批判もあった。そのいくつかをとり上げてみると、昨年度については、良かった点は船給馬という絵を基本にして展示したため一般に興味をもたれた。悪かった点は少し専門的になりがちで展示資料も少なかった。また民俗資料が中心であったため一般観覧者の価値判断が低くみられた。

また一方五稜郭分館の特別展「黒船渡来と箱館開港展」では良かった点は幕末期の西洋文明の移入に対する一般市民の関心を喚起することができた。悪かった点は市内小中学校が夏季休暇中のため学生生徒の団体見学者が少なかった。両者とも新年度への反省改善点としては日本海展については、一般に興味をもたれるもの、感覚的に高価なものを展示した方が効果的。黒船渡来展については、市内小中学校へのPRの充実、市民の郷土に対する誇りと愛情をかもし出すための特別展を開催すべきであるなどの声があった。

その他磯の生物かんさつ会、科学教室の開催、市民文化雑誌の編集への注文など多岐にわたった。これらの点から私共は事業を計画する場合第一に市民サイドに立って考えることが肝心である。この他博物館全体の反省点として、とかく展示にしても少し専門的になりがちなので、市民に親しまれるためには大きく脱皮が必要である。

なお参考までに本年の市民講座は考古・民俗・歴史・生態の4講座が開かれる予定である。

科学教室は小学校4、5、6年生を対象に天体、こん虫、植物の3教室11回となっている。この他野外かんさつ会が昆虫、植物の2コースがある。

函館空港用地内の遺跡調査を終えて

函館市の東部に海岸線に沿って発達する日吉段丘面に空港がある。赤坂町から中野町にかけて滑走路が拡張し、さらに進入灯の建設工事が計画された。この一帯には縄文時代から歴史時代にいたる遺跡が数多くある。昭和43年には当時の空港敷地内に存在する遺跡を函館空港第何地点遺跡と呼んでいたが、昭和49年4月から函館市教育委員会が調査した遺跡は函館空港第4地点遺跡と新たに用地買収した拡張区域の中野遺跡である。中野遺跡は銭亀宮の川をはさんで中野A・中野B遺跡に分かれているが、中野A遺跡までが現地表面から4mほど削平され、中野B遺跡の中央に進入灯が設けられることになっていた。

調査は、昭和49年4月から昭和52年3月まで3か年間で、遺跡発掘面積33,489㎡を完掘して報告書を完成することになり、動員された人員、予算なども、これまで東北・北海道で例のない大規模なものであった。

調査結果、函館空港第4地点遺跡では縄文時代前期の竪穴住居址55軒を含む大集落地が確認され、中野遺跡の銭亀宮の川の西側では形式の異なる住居群が2か所、銭亀宮の川の東側では時期の重複する縄文時代早期の集落地が確認され、資料点数は72万点にのぼる莫大な量であった。これらはようやく市立函館博物館に收藏され、報告書作成作業

が続けられた。昭和52年3月31日に函館市教育委員会から発行された報告書は、1,300頁にのぼるもので“巨大な報告書”と評されている。

行政調査による博物館資料は、研究者からみると未整理資料でそれらがすぐに研究に役立つものとかぎらない。博物館資料とは、一般に公開し役立つものでなければならない。文化庁と建設省でとりきめた発掘調査費は必要最少限のもので、継続的な管理費と学術研究の費用は含まれていない。乏しい博物館事業費のなかで、いかにして莫大な資料を管理して役立てるか。調査期間中に縄文時代のはじめの集落跡の調査ということで各地から研究者達が訪れた。そして市民も遺跡見学に参加して、成果のまとめに多くの期待を寄せてこられた。学術的に貴重な調査のために調査員が16ミリの記録撮影も行なったが、調査後の成果を市民や研究者に役立てなければならない。

ややもすると博物館が“もの”の収蔵庫と化し、ほこりっぽい、かびくさい施設になってしまう。

いままでも不明とされていた縄文時代のはじめの集落が、函館で発見されたことは喜ばしいことである。どのような人達がどんな家に住み、どんな生活をしていたかを少しでもはやく多くの市民に公開したいものである。

〈主任：千代 肇〉

市立函館博物館沿革史 (その8)

〈開拓使函館支庁仮博物場〉 (1)

函館新聞の第1号が伊藤鑄之助の手で発刊されたが明治11年1月7日付である。資金的には初代渡辺熊四郎等の後援があり、活版機械は開拓使函館支庁のものを借りたといわれる。函館新聞は現在市立図書館と渡辺家に保存されており、明治初期の函館の出来事を知る上に大いに参考となるが、日刊でなく5日毎に発行し7月から隔日発行となった。函館博物館の創設も明治11年なのでこの新聞の記事によって大略を知ることができるので紹介する。

(1) 明治11年1月17日付第3号

「当港の公園地は谷地頭にあれど場所至ってせまく唯公園と云ふ名のみにして、市街の人民打集る観娯場とするに足らぬ、当支庁にても此に心付きかつ人民の知識をも開くに肝心なる博物館も設けて追々公園地を開く五所存なり」という記事があり開拓使函館支庁に公園の整備と博物館の新設の気運のあったことが知られる。

(2) 明治11年5月17日付第27号

開拓使録事第33号

鳥獣虫魚木土石の類尋常見馴る形容のもの採獲の節は昨10年9月第31号広告の通り其物品を損傷せざる様手当致し置届出べくの処直ちに該品を持参候もの住々有之中には無用のものも有之自然買上げざる時は遠路の運搬も徒費徒勞に属し候、自今は運搬前に届出候儀と可相心得此旨更

に広告候也

明治11年5月14日

開拓使函館支庁

という記事があり、昨明治10年9月第31号広告という記載は函館新聞創刊以前のことであるので別に調査した結果「明治10年開拓使御布達」に明治10年9月28日、第31号「鳥獣虫魚木土石ノ類ニテ尋常見馴ル形容ノモノ採集致シ候ハバ其物品ヲ損傷セサル様手當致置速ニ其筋へ可届左様候へば相代価ヲ以テ買上候儀モ可有之此旨広告候也」とある。

ここで考えられることは開拓使東京出張所仮博物場の場合も函館と同様必要な資料は有償で買い上げていた。明治9年東京仮博物場費1366円58銭4厘、洋銀142円33セント（これは明治8年度の決算報告と思われる）とあり、この洋銀は明治8年9月18日千島樺太交換用務でカムチャッカに出張した黒田開拓使長官の命を受けて同行した佐藤秀頤がペトロパウルスクで購入したカムチャダールの毛皮のシューパー一式に支払われたと考えられる。また開拓使事業報告に、明治10年函館支庁仮博物場費として80円87銭4厘とあるのも当然資料購入の費用と思われる。

(3) 明治11年6月17日付第33号

公園地内の博物館は昨日柱立になりました。

(4) 明治11年7月16日付第43号

谷地頭の公園へ建てたる博物館は全く落成^{デキ}あがり去る12日當繕係より民事課に引き渡しになった。

この(3)(4)の記事に関連して開拓使事業報告には、明治11

年、青柳町公園地博物館、新築、32坪833、起工5月、竣工7月、経費1014円74銭8厘とあり、明治11年函館仮博物場費、407円40銭6厘との記載もある。

〈学芸係長：
姫野 英夫〉



明治11年創設当時の開拓使
函館支庁仮博物場

